

〔論 文〕

社会的排除が状態自尊感情および 将来予測に及ぼす影響

清水三千香・藤島喜嗣

Effects of Social Rejection on State Self-esteem and Perceived Likelihood of Future Rejection

Michika SHIMIZU and Yoshitsugu FUJISHIMA

The present study investigates the effect of ambiguous rejection (e. g., people are ignored by others) and obvious rejection (e. g., people are negatively evaluated by others) on predictions of future rejection. One hundred and thirty-seven male and female undergraduates were asked to imagine situations in which they were either accepted, rejected implicitly, or rejected explicitly, and to complete a questionnaire. The results suggest that social rejection lowered participants' state self-esteem and boosted the perceived likelihood of future rejection by the rejecter. However, social rejection did not boost the perceived likelihood of future rejection by people they didn't already know. Although there was no difference between ambiguous rejection and obvious rejection generally, males were less likely than females to lower their state self-esteem in cases of obvious rejection. The results are discussed from the perspective of sociometer theory.

Key words: social rejection (社会的排除), self-esteem (自尊感情), perceived likelihood of future rejection (排除可能性知覚)

問 題

人は、他者の助けがなければ生き残れないし、子孫を残すこともできない。生存の為には必然的に様々な他者と関わり、集団に所属する。安定的固定的群生活をする霊長類のヒトにとって、対人関係は、身体的健康だけでなく、精神的健康にも非常に重要な役割を果たしている。つまり、自分が所属する集団に自分が受け入れられていると感じることは、日々の日常生活を満足に過ごすことにもつながる。また、この先出会うであろう他者や集団に対しても、自分は受容されるとポジティブに捉えることもできると考える。

このように、他者や集団との関わりは、他者や集団から受容されると、当人にとって大きな心の支え

となる。これに対し、他者や集団からの拒否は、当人にとって多大な心理的苦痛をもたらす。拒否により心理的苦痛を与えられた人の自己評価や自尊感情は、低下すると考えられる。これにより、自分を拒否した他者や集団は自分を再び仲間に入れないだろうと考えるかもしれない。さらに、将来出会うであろう未知の他者や集団に関しても自分は受容されないのではないかと悲観的に考えてしまうと考えられる。本研究は、他者からの拒否が状態自尊感情や将来における受容可能性知覚に負の影響を与えているかどうかを検討する。

社会的排除

Baumeister & Leary (1995) によると、人は皆、他者や集団から受容され、集団の良い一員であり続けたいと願う所属欲求 (the need to belong) を有し

ている。この所属欲求は、人間の進化に根ざしているため、文化や時代を超えて普遍的かつ基本的なものである(岡田・中山, 2008)。また, Baumeister & Leary (1995) は、所属欲求の充足が感情や認知、適応、達成行動など様々な側面と関連すると仮定している。この仮定は多くの理論や研究知見でも支持されている(Buhrmester, 1996; Deci & Ryan, 2000; Hazan & Shaver, 1994; Mikulincer, Florian, & Hirschberger, 2004; Sheldon, Elliot, Kim, & Kasser, 2001)。Baumeister & Leary (1995) によると、所属は快感情を生み出すのに対して、実際の別離や別離を想像するだけでも私たちは不快感情を経験するといわれている。そして、人は、現存する人間関係をもはや維持する理由がないときでも、その社会的絆を失うことに抵抗する。

社会的絆についての類似概念として愛着(attachment)が存在するが、所属欲求と愛着には異なる箇所がある(Baumeister & Leary, 1995)。第一は、所属欲求が向けられる先は特定の人である必要はなく、基本的に誰でもよいが、愛着の場合は主に母親など世話をした人となるということである。第二は、愛着はひとりの他者との間に得られていれば十分であり、人数が増えてもその影響力は小さくなる一方だということである。第三は、ある相手との関係を喪失したときに別の人で埋めることが可能であるかの違いである。所属欲求は、集団に所属することが生存のために不可欠であるため、あるひとりとの関係を喪失しても別の集団に所属することさえ出来れば、所属欲求を満たすことが可能である。一方で愛着の場合は、ある特定の他者という限定された他者でないと愛着を有することができない。そのため、母親などの愛着の対象であった他者を喪失した場合、愛着の対象外である他者や集団には喪失の穴を埋めることは不可能である。

その一方で、Baumeister & Leary (1995) は、他者との関係や所属感が欠如し、所属欲求が満たされない状態を社会的排除と呼んだ。Baumeister & Tice (1990) は、排斥の条件として次の三点を指摘している。第一は、集団の存続や福祉に貢献できないことである。何らかの目的を持って活動が行われ

る集団組織に、個々人はその目的達成に役立つ人材としてその場に参加している。したがって、個々人に期待された役割を果たさず、目標達成の障害となる人物は、役に立たない人物と評価され、解雇という名の排除を受けることになる。第二は、協調性や道徳性の欠如である。自己の利益や衝動のために周囲に迷惑をかける人物が横行すれば組織や集団は破綻してしまう。それゆえ、ほとんどの社会では一定の規範や法律が設けられており、逸脱者には禁固や懲役、死刑といった排斥のペナルティーが科せられる。そして第三が魅力の欠如である。相手が感じる魅力度が低かったり、期待した魅力を維持できなかったりした場合、失恋や離縁といった名の排除が予想される。また、一般に、相手から無視されたり、自分の申し出を断られたり、あるいはグループから仲間はずれにされたりする状況を指す対人的拒絶(interpersonal rejection)がある(岡田・中山, 2008)。

Leary (2001) は、拒絶(rejection)、排斥(exclusion)、追放(ostracism)、放棄(abandonment)、片思い(unrequited love)などの対人的拒絶に関する概念に共通する要素として、関係評価の低さがあるとしている。関係評価(relational evaluation)とは、相手との関係に価値があり、その関係を重要で親密なものともみなしている程度のことである(岡田・中山, 2008)。対人的拒絶を関係評価の観点から捉えることの利点の一つは、拒絶に関する現象に程度という幅を持たせることだと岡田・中山(2008)は述べている。状況によって相手との程度にばらつきがあると考えられることから、「拒絶されたか否か」ではなく、「どの程度拒絶されたか」という議論が可能になるのである。Leary (2001) は、最大限の拒絶(排斥)から最大限の受容(包含)までの段階を設定し、この段階を関係評価の程度として捉えている。たとえば、Leary, Haupt, Strausser, & Chokel (1998) は、大学での指導教官や初対面の異性から評価される場面を想定させ、その評価の程度を否定的なものから肯定的なものまで連続的に変化させることで拒絶の程度を操作している。

以上の議論より、社会的排除は、友人からある日突然無視されたといった曖昧な場面での排除や、実

験場面での被験者や他者や集団から排除されるといった明確な排除など、拒絶の程度に幅を持たせて考えることが可能である。友人からの無視は、Leary (2001) の拒絶と受容の連続体で捉えると、消極的な拒絶程度にあたる。一方で、実験場面での被験者や他者や集団から排除は、最大限の拒絶の程度にあたる。このことから、排除の割合により差異が生じるのではないかと予測できる。

さらに、社会的排除が反社会的行動に関係する様々な要因に直接的な影響を及ぼすことが明らかになっている。先行研究として、社会的排除を受けた人は、自分自身の身体的・情緒的苦痛の低下、共感性の低下が起こるとした研究が挙げられる (DeWall & Baumeister, 2006)。参加者は、「結婚は長続きせず人生の後半にはひとりで孤独に過ごすでしょう」という将来孤独条件、「長期的で安定した結婚生活や友人関係を続け、一生にわたって友人たちと楽しく過ごすでしょう」という将来所属条件、「人生の後半は事故にばかりあうでしょう」という将来不幸条件の3種類のフィードバックのいずれかを受ける前後に、皮膚に圧力をかける機械を用いてどの程度痛みを耐えられるかを測定した。この結果、孤独条件の参加者は他の条件の参加者よりも強い痛みを受けて初めて、痛いと感じることが示された (第1実験)。さらに、共感性については、失恋した人 (第4実験) や骨折した人 (第5実験) が書いたとされるエッセーを読み、その人に対する感情を評定した。その結果、孤独条件の参加者は、エッセーを書いた人への共感性、同情、あたたかさ、優しさなどの感情が有意に低くなっていることが示された。これに関連して、非行少年に一般少年よりも共感性が乏しい者の割合が多い (法務総合研究所, 2003) ことから、共感性の低下が反社会的行動を増大させることがわかる。

また、Twenge, Baumeister, Tice, & Stucke (2001) は、社会的排除が攻撃行動を引き起こすかの実験を行った。実験の結果、将来が孤独になると考えただけで、人は自分を批判した他者に対して厳しく、攻撃的に対応することが明らかになった。さらに、社会的排除により身体的・精神的健康に影響

を及ぼすとした研究もある。遠藤 (2006) は、社会的排除と拒絶への反応に対する自尊感情の影響についての実験を行った。遠藤 (2006) によると、人は他者から向けられた肯定的な関係の評価よりも、否定的な関係的评价に対して極めて強く敏感に反応することが示されている (Leary, Tambor, Terdel, & Downs, 1995; Williams & Zadro, 2005)。

他者からの否定的関係評価は、気付かずに放置しておく相手から自分に対する排斥 (exclusion) や拒絶 (rejection) などに結び付き、己にとって損失を招く事態につながりかねない。そこで、このような危機的状况に対して確実かつ迅速に対応すべく、他者からの排除・拒絶のサインを危険信号として速やかに検出し、かつ強い反応が生じるという結果が近年様々な領域において報告されている (Eisenberger & Liberman, 2005; Williams, 2001)。Eisenberger & Liberman (2005) の実験は、他者から暗黙裏に排除されるよりも実験の参加を希望したのに拒絶されてしまうことに対して学生は、より強く反応することを示している。つまり、特性としての自尊感情は将来に向けての予測反応を調整することが示唆されたのである (遠藤, 2006)。Baumeister & Leary (1995) で述べられているように、所属欲求が人間の基本的欲求として存在するならば、所属欲求が阻害される状況では欲求を充足しようとする傾向が強まると考えられる。そのため、対人関係を構築・維持するために必要な認知システムは、排斥を経験することによって活性化すると考えられる (岩切, 2005)。これらのことから、人が他者や集団から拒否され、所属欲求が満たされない状態に陥ると、身体的・精神的健康に多大なる影響を与えるということが考えられる。

ソシオメータ理論

自尊感情 (self-esteem) とは、自己に対する評価感情で自分自身を基本的に価値あるものとする感覚である。従来、自尊感情は、自分が自分自身に対して抱く自己完結的な評価感情だと理解されてきた。

これに対し、自尊感情の対人的側面を強調した理論がソシオメータ理論である (Leary, 2004)。ソシ

オメータ理論は、自己の社会的側面を自尊感情という観点から、よりシステムティックに捉えようとした理論である。進化心理学からの影響が色濃くみられるこの理論は、社会的動物としてのヒトにとって最も重要な関心事は、所属集団のなかでの自己の位置を安全で確かなものとする事だ、という前提からスタートする。周囲の他者や集団、もしくは自分との関係に価値や魅力を見出さないとき、自分はその関係から排除される危険性が高い。もし、他者から低い評価を与えられていることに気付かなければ、追放・排除が決定的になってしまう危険性があるだろう。社会からの拒絶は進化の早い段階では死を意味していたと考えられるため、自尊感情が低下するような状況では、それを回復するような行動を動機づけられる(伊藤, 1998)。そこで、現下の状況において、自分は他者や集団からどのように評価されているかをモニターし、とくに評価の低下やその懸念がありそうな場合に、それをいち早く敏感に感じ取るような仕組みが私たちには備わっている。その仕組みこそが自尊感情である。

それゆえ、ソシオメータ理論からみると、自尊感情維持動機という言い方は不適切である。ソシオメータ理論の考え方では、自尊感情そのものは追求すべき目的ではなく、あくまで所属の程度によって生じる心理状態であることになる。この捉え方は、自尊感情そのものに対する欲求を仮定する理論的立場(Case & Williams, 2004; Maslow, 1968; Tesser, 1988)とは大きく異なっており、ソシオメータ理論の独自の点であるといえる(岡田・中山, 2008)。

これらのことを踏まえると、自尊感情を低める出来事は、人から嫌われるようなことをしてしまったり、他者からの受容を低めたりする出来事となる。反対に自尊感情を高める出来事は、他者からの受容感を高める出来事といえる(Leary et al., 1995)。他者や集団からの拒否という社会的排除経験が状態自尊感情を低下させ、排除された本人は自分自身に価値を見出せないという全般的な自己価値の低下により、将来予測など多方面に負の影響を与えられられる(Sommer & Rubin, 2005)。また、自尊感情には個人差があるが、ソシオメータ理論からすれ

ば、他者や集団からの受容感における個人差ということの意味する。さらに、人にとっての心理的幸福感の直接の原因は、他者からの受容感であり、自尊感情が高い人は、自分が他者や集団から受容される人物であり、他者や集団が自分と関係を持つことに価値をおいていないのだと考えやすいといえる(Leary et al., 1995)。

将来の予測への影響

人は、将来を予測するとき、過去の経験を元にして考える。過去に起きた出来事と類似した出来事に今現在自分が遭遇しそうな場合、人はその出来事に上手く対処して精神的にも身体的にも安定した日常生活を送れるように行動する。特に過去に辛い経験をしているのならば、その経験に再び遭遇しないように対処し、さらに予測する。

また、他者や集団からの受容という出来事が心理的幸福感であるならば、他者や集団からの排除という出来事は、人が生きていく上で最も忌むべき出来事である。この社会的排除経験に関して、将来の対人関係について焦点を当てて考えてみると、高い自尊感情を持つ人は、他者や集団に排除されず、受容され続けるということである。高い自尊感情は、全般的な自己価値に良い影響を与えるだけではなく、将来出会うであろう他者や集団に対して「自分は、この先も他者や集団に受け入れられる」と肯定的に捉えさせると予測できる。しかし、自尊感情が低い人は、「自分を排除した他者や集団に再び受け入れられないだろう」と考えてしまう傾向にあると予測できる。さらには、将来出会うであろう他者や他集団に関しても、「自分は将来誰にも受け入れられないだろう」と同様に考えてしまう傾向にあるのではないだろうかと予測できる。

以上のことから、社会的排除経験は、全般的な自己価値を低下させ、自分を排除した他者や集団に対しても、将来これから出会うであろう他者に対しても否定的に捉えさせてしまうだろうと考えられる。本研究はこの点について検討することとした。

仮説

以上のことから、本研究では、二つの仮説を検討する。第一に、状態自尊感情は、他者から受容され

る場合より、排除される場合に低下するだろう。第二に、他者や集団からの排除可能性知覚は、受容される条件よりも排除される条件で高まるだろう。この傾向は、新奇他者においてもみられるだろう。

方 法

実験参加者

全学共通科目「心理学 I A」受講者である上智大学生 1~4 年の男性 60 名、女性 76 名、性別未記入 1 名の計 137 名が実験に参加した。参加者全体の平均年齢は 18.88 歳 ($SD=.97$) であった。

手続き

場面想定法を用いた質問紙調査を実施した。質問紙は 3 パターンあり、曖昧な社会的排除条件、明確な社会的排除条件、受容条件の 3 条件のシナリオを用意した。この 3 条件の質問紙を、講義時間中にそれぞれ無作為に配布、回答をしてもらい、回収した。

質問紙の構成

シナリオ 曖昧な社会的排除条件、明確な社会的排除条件、受容条件のシナリオは、調査対象が大学生ということで、大学生に起こりうる身近な排除場面を設定した。まず、曖昧な社会的排除条件のシナリオは、次のように設定した。

あなたは、大学の授業も、昼食も、下校も常に一緒のとてとも仲の良い友人が 2 人います。ある日、あなたが朝『おはよう』と挨拶しても 2 人の友人は、挨拶を返さず、昼食もあなたと一緒に食べず、2 人の友人だけで 昼食を食べていました。また、話しかけても 2 人の友人は、あなたの話を全く聞かず、授業が終わると、あなたを無視して 2 人で帰ってしまいました。

今回、本研究の調査対象者が大学生であったため、友人からの無視という社会的排除は、男女問わず大学生にとっては、苦痛である出来事であろうと考え、このシナリオを作成した。

次に、明確な社会的排除条件のシナリオは、次のように設定した。

あなたは、今日初めて会う 2 人の人と一緒に実験の協力をするようになりました。実験は『3 人で討論会を 2 回やってもらい、2 回やって討論会の邪魔に

なると思う人を 1 人外してほしい』という内容でした。あなたと他の 2 人は、3 人で討論会を 2 回行いました。しかしその結果、外されたのは、あなたでした。

友人場面での無視という間接的な排除場面だけではなく、直接的な排除場面も考えられるので、本研究の調査対象者に合わせてこのシナリオを作成した。明確な社会的排除条件は、他者から否定的な評価を受けた結果として排除された形となっている。これに対し先述の曖昧な社会的排除条件は、無視されるという場面であり、否定的な評価を受けているかどうか不明瞭である。この点の相違が影響を及ぼすかもしれないと考えた。

最後に、受容条件のシナリオは次のように設定した。

あなたは、大学の授業も、昼食も、下校も常に一緒のとてとも仲の良い友人が 2 人います。ある日、あなたが朝『おはよう』と挨拶すると、2 人の友人は、挨拶を返し、昼食もあなたと一緒に 3 人で楽しく食べました。また、話しかけると 2 人の友人は、あなたの話を楽しそうに聞き、授業が終わると、あなたと一緒に 3 人で仲良く帰りました。

統制条件である受容条件は、2 人の仲の良い友人や初対面の 2 人の他者からの排除と違い、2 人の仲の良い友人から受容されるという対比的な場面に設定した。一方で、明確な排除条件は、実験場面で出会う初対面の 2 人の人である。友人だけではなく、初対面の他者からの排除という異なる場面においても否定的感情は喚起すると考え、設定した。

質問項目 最初にシナリオを読んでもらった。設定された場面に遭遇した時の状態自尊感情の程度を測定するために、「自分の日頃のふるまいは適切だと思う」、「他の人よりも劣っていると思う」、「自分は何も悪くないと思う」などをたずねた否定的感情 10 項目を「5. あてはまる」~「1. あてはまらない」の 5 件法で回答させた。この質問項目は、舘・宇野 (2000) を参照し、排除場面に見合った質問項目となるよう独自に作成したものである (付録 1)。

次に、「2 人は、私を無視し続けると思う」、「2 人は、私を受け入れてくれると思う」、「私は 2 人と

って邪魔な存在だと思う」などの排除当事者からの受容可能性の程度8項目を「5. あてはまる」～「1. あてはまらない」の5件法で回答させた。この質問項目も、館・宇野(2000)を参照し、排除場面に見合った質問項目となるよう独自に作成したものである(付録2)。

さらに、「他の人は、私を無視し続けると思う」、「他の人たちは私を受け入れてくれると思う」、「他の人は自分と一緒にいてくれないと思う」などの新奇他者からの受容可能性の程度8項目をたずねた。これらの項目も館・宇野(2000)を参照し、排除場面に見合った質問項目となるよう独自に作成し、「5. あてはまる」～「1. あてはまらない」の5件法で回答させた(付録3)。

そして、今現在の自分についてどのように感じているかを測定するために、「皆は自分を頼りにしていると思う」、「私は人から頼りにされていると思う」、「私は存在感があると思う」などの項目からなる塩田(2003)の状態自尊感情尺度の一部を使用した。この8項目に「5. あてはまる」～「1. あてはまらない」の5件法で回答させた。塩田(2003)の状態自尊感情尺度は、「自意識過剰因子」、「日常生活因子」、「満足因子」、「他者志向因子」で構成されているが、今回の調査では、「周りの人が皆優秀に見える」、「今の私は、他の人よりも学問的能力がないと思う」など学業面を中心にたずねている満足因子の質問項目5項目は、本研究には関係ないと判断し、使用しなかった。ただし、この満足因子の1項目である「この教室の他の人に比べ、自分は価値のある人間だと思う」という項目は使用した。本研究の調査が、授業を受講している学生であったため、自分の周りにいる受講している他の学生に比べてどのように感じるかをたずねていると解釈しうると判断した。しかし、この状態自尊感情尺度は、本研究では分析対象としなかった。

結 果

信頼性分析

各尺度に対して信頼性分析を行った。設定した場面に遭遇した時の否定的感情10項目に対し信頼性

分析を行った結果、クロンバックの α 係数は $\alpha = .73$ であった。「他の人よりも劣っていると思う」のI-T相関の値が低かったため、この項目を除いた9項目で再度、信頼性分析を行った。この結果、クロンバックの α 係数は $\alpha = .83$ と高い数値を示した。このことから設定した場面に遭遇した時の否定的感情は、十分な信頼性を有していると判断した。

設定した場面に遭遇した時の排除当事者からの排除可能性知覚8項目に対して信頼性分析を行った。この結果、クロンバックの α 係数は $\alpha = .92$ と高い数値を示した。このことから設定した場面に遭遇した時の排除当事者からの排除可能性知覚は、十分な信頼性を有していると判断した。さらに、新奇他者からの排除可能性知覚8項目に対し、信頼性分析を行った結果、クロンバックの α 係数は $\alpha = .87$ であった。このことから、新奇他者からの排除可能性知覚も十分な信頼性を有していると判断した。

信頼性分析後、設定した場面に遭遇した時の否定的感情10項目を合計した。この10項目を合計した得点を、否定的感情と名付けた。また、設定した場面に遭遇した時の排除当事者からの排除可能性知覚8項目を合計して得点を算出し、この8項目を合計した得点を、当事者評価と名付けた。さらに、新奇他者からの排除可能性知覚8項目を合計して得点を算出し、この8項目を合計した得点を、将来評価と名付けた。それぞれの項目ごとの合計を算出し終えた後に、否定的感情、当事者評価、将来評価の平均値、標準偏差を算出した。その結果、否定的感情の平均値は30.48、標準偏差は6.75であった。当事者評価の平均値は23.17、標準偏差は7.61であった。また、将来評価の平均値は19.25、標準偏差は5.51であった。

性別ごとにみた排除の影響(表1)

2(性別: 男・女)×3(シナリオ: 曖昧な社会的排除・明確な社会的排除・受容)の被験者間2要因の分散分析を行った。その結果を図1に示す。

否定的感情に及ぼす影響に関して、有意に近い性別の主効果が認められた($F(1,125)=3.64, p=.06$)。男性($M=29.35$)よりも、女性($M=31.54$)で否定的感情が喚起しやすい傾向がみられた。また、シナ

表 1 性別と排除条件別にみた平均値と標準偏差

	男 性			女 性		
	曖昧な排除条件	明確な排除条件	受容条件	曖昧な排除条件	明確な排除条件	受容条件
否定的感情	32.88(5.79)	28.57(6.27)	27.29(6.17)	32.56(4.94)	35.57(6.01)	26.63(6.50)
当事者からの排除可能性知覚	26.94(6.35)	25.52(5.38)	17.24(7.01)	27.56(5.25)	26.52(5.85)	15.18(4.50)
新奇他者からの排除可能性知覚	20.38(4.79)	20.37(5.56)	20.19(6.25)	17.70(4.21)	20.38(6.88)	17.14(4.53)

註) カッコの中は標準偏差

リオの主効果も認められた ($F(2,125)=12.26, p<.001$)。Bonferroni 法による多重比較の結果、曖昧な排除条件 ($M=32.69$) や明確な排除条件 ($M=32.23$) といった排除条件のほうが、受容条件 ($M=26.93$) と比較して否定的感情を喚起しやすい傾向がみられた。しかし、曖昧な排除条件 ($M=32.69$) と明確な排除条件 ($M=32.23$) との間には有意差はみられなかった。このことから、仮説 1 は支持された。さらに、性別×シナリオの交互作用効果がみられた ($F(2,125)=5.74, p<.05$)。Bonferroni 法による多重比較の結果、曖昧な排除条件では、男性 ($M=32.88$) と女性 ($M=32.56$) との間に違いはみられなかった。明確な排除条件では、女性 ($M=35.57$) は、男性 ($M=28.57$) よりも否定的感情が喚起しやすかった。受容条件では、男性 ($M=27.29$) と女性 ($M=26.63$) との間に明確な違いはみられなかった。見方を変えると、男性では、曖昧な排除条件 ($M=32.88$) が明確な排除条件 ($M=28.57$) や受容条件 ($M=27.29$) よりも否定的感情が喚起しやすかった。また、女性では、明確な排除条件 ($M=35.57$) や曖昧な排除条件 ($M=32.56$) は受容条件 ($M=26.63$) よりも否定的感情が喚起しやすかった。

排除当事者からの排除可能性知覚に関して、条件の主効果が認められた ($F(2,127)=47.92, p<.05$)。この結果を図 2 に示す。

Bonferroni 法による多重比較の結果、曖昧な排除条件 ($M=27.32$) と受容条件 ($M=16.19$) との間には 5% 水準で有意差が認められた。また、明確な排除条件 ($M=26.07$) と受容条件 ($M=16.19$) との間に有意差が認められた。曖昧な排除条件 ($M=27.32$) と明確な排除条件 ($M=26.07$) の間には差がみられなかった。性別の主効果は認められなかった ($F(2,127)=.02, ns$)。また、性別×シナリオの交

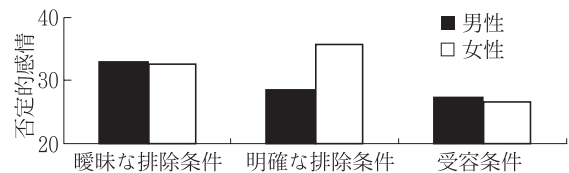


図 1 性別と排除想定が否定的感情に及ぼす影響

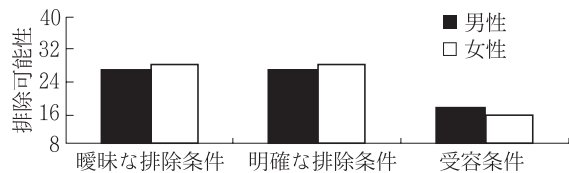


図 2 性別と排除想定が排除当事者からの排除可能性知覚に及ぼす影響

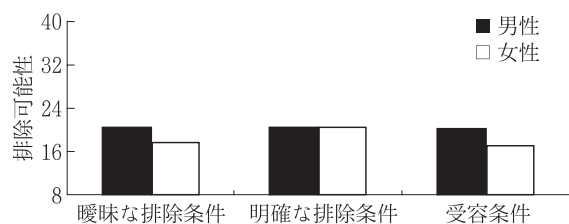


図 3 性別と排除想定が新奇他者からの排除可能性知覚に及ぼす影響

表 2 全体の相関係数

	感情得点	友人評価	将来評価
否定的感情	1.00	.41**	.37**
当事者からの排除可能性知覚		1.00	.22*
新奇他者からの排除可能性知覚			1.00

註) **は 1% 水準で有意
*は 5% 水準で有意

交互作用効果もみられなかった ($F(2,127)=.92, ns$)。

新奇他者からの排除可能性知覚に関して、有意に近い性別の主効果が認められた ($F(1,123)=3.83, p=.06$)。男性 ($M=20.30$) の方が、女性 ($M=18.41$) よりも排除可能性を高く知覚していた。条件の主効果は認められなかった ($F(2,123)=1.15, ns$)。交互作用効果もみられなかった ($F(2,123)=.99, ns$)。

よって、仮説2は支持されなかった。この結果を図3に示す。

否定的感情と排除当事者からの排除可能性知覚、新奇他者からの排除可能性知覚との相関

状態自尊感情として測定した否定的感情が将来の排除可能性知覚にどのような影響を及ぼしているか検討するために、否定的感情と排除当事者からの排除可能性知覚、新奇他者からの排除可能性知覚との相関係数を算出した(表2)。その結果、否定的感情と排除当事者からの排除可能性知覚との間には、有意な正の相関がみられた($r=.41, p<.001$)。このことから、否定的感情が強いほど排除当事者からの排除可能性知覚は高まる傾向にあった。否定的感情と新奇他者からの排除可能性知覚の間にも、有意な正の相関がみられた($r=.37, p<.001$)。否定的感情が強いほど新奇他者からの排除可能性知覚は高くなる傾向にあった。排除当事者からの排除可能性知覚と新奇他者からの排除可能性知覚の間には有意な正の相関がみられた($r=.22, p<.05$)。このことから、排除当事者からの排除可能性知覚が高いほど新奇他者からの排除可能性知覚は高かった。

考 察

本研究の結果は、仮説1を支持していた。社会的排除によって自尊感情の低下が生じる可能性が示された。これは、ソシオメータ理論を支持するものといえる。排除を受けた被験者は、排除を受けた直後に否定的感情を喚起させている。前述したようにソシオメータ理論より、自尊感情を低める出来事は、人から嫌われるようなことをしてしまったり、他者からの受容を低めたりする出来事となる。曖昧な排除条件や明確な排除条件では、自分が所属集団から排除されたということを察知したために、否定的感情が喚起され、自尊感情の低下につながったのではないかと考えられる。

また、社会的排除に関して、2人の友人から無視されるといった排除と、選ばれなかったという直接的な排除には違いはみられなかった。このことから、社会的排除の程度に関係なく他者や集団から自分が排除されたと感じたならば、否定的感情が喚起され

るのだらうと考えられる。その一方で、Molden, Lucas, Gardner, Dean, & Knowles (2009)は、排除者の動機づけと否定的評価が明確で能動的な排除(e.g., ある人が排除された時)と比較して、排除者の動機づけと否定的評価が潜在的で受動的な間接的な排除(e.g., ある人が無視された時)では、その後の影響が異なることを示している。明確に排除されると、社会的な喪失感覚と予防焦点(prevention focus)的な反応を生み出し、社会的接触の回避、自分が取るべきでない行動に関する思考、焦り感情を増大させる。反対に、無視されると、社会的獲得の失敗感覚と促進焦点(promotion focus)的な反応を生み出し、社会的接触を再び生じさせ、自分の取るべき行動について考え、落胆を増大させるのである。本研究では、2人から排除という直接的な排除も2人の友人からの無視、どちらの排除も程度の差異はなかったが、焦りや落胆といった否定的感情の質的相違が存在すると考えられる。将来的には、社会的排除の質と程度をより具体的に弁別し、どのように影響が異なるかを検討すべきである。

本研究の結果より、明確な排除条件では、男性が女性より否定的感情を感じなかった。これは、見ず知らずの人の目は、女性よりも男性のほうが気にしづらいからではないかと考えられる。また、対人関係への関心は一般的に女性よりも男性の方が低い。本田(2007)は、ソーシャル・サポートの研究では、男性よりも女性の方がネガティブな出来事が生じた時に周りからのサポートを受けやすいことが知られていると述べている。また、福岡・橋本(1997)は、心理的苦痛(抑うつ)に対するサポートは男性よりも女性が多く見出しているという(本田, 2007)。女性は、自分が他者や集団から排除されることを男性よりも、敏感に感じ取りやすいことがいえる。よって、明確な排除条件で男性は否定的感情が高まらなかったのではないかと推測できる。性別に関係なく自分を排除した排除当事者に対しては、自分はもうその集団に必要なと思うため再受容を推測せず、新奇他者や集団からの受容を推測するのではないかと考えられる。

本研究では仮説2は支持されなかった。これは、

被験者が、質問紙で呈示した将来について見解が異なっていたからではないかと考えられる。被験者によっては、将来を数ヶ月あるいは数年と捉えて回答していたのではないだろうかと思われる。

自尊感情について、前述した Leary (2004) の自尊感情は、特性自尊感情と状態自尊感情からなることにより、特性自尊感情も影響を及ぼしていると考えられる。特性自尊感情が高い者は、ポジティブな期待を抱くので、排除を受けてもそのインパクトを緩衝できる。一方、特性自尊感情が低い者は、排除を受けるとネガティブな期待を抱くので、そのインパクトを緩衝できない。本研究では、社会的排除という場面により自尊感情が変化するという状態自尊感情のみを測定したが、特性自尊感情は測定されていない。この個人差を考慮した再検討を行うことが今後の課題といえるだろう。

遠藤 (2005; 遠藤, 2006 で引用) は、まだ生起していない状況で自分がどのようにふるまうかを予測する際に、特性としての自尊感情が影響することを検討した。まず、LAN でつながれた PC 上でのボールゲームに匿名の仲間数名とともに参加した人が、自分のところにボールがほとんど来ないことを経験する排除条件と、仲間と同じ程度にボールが来ることを経験する受容条件を設定した。これらの2条件に、自尊感情の高い者 (自尊感情高群) と低い者 (自尊感情低群) が約半々となるように、参加者を割り当てた。その結果、自尊感情高群では自己の関係的評価の高さを信じる傾向は1回きりの排除や受容経験の影響を受けなかったが、自尊感情低群は排除経験による影響を受け、1度でも脅威経験をすると第三者からの受容まで疑いを持ち、積極的相互作用を控える傾向を示した。つまり、眼前の他者から排除されるという脅威状況に遭遇すると、相対的に否定的な関係性評価の表象が活性化する。その結果、自分はいたいの場合高い関係性評価を得られる人間だということに確信が持てなくなるために、受容されると予測できなくなったと考えられる (遠藤, 2006)。このことから、自尊感情が低い人は、1度でも他者や集団に排除されると、将来を予測する際に、自分を排除した他者や集団からの社会的排除経験を

思い起こし、将来に対して否定的な感情を抱く傾向があると推測できる。

一度の社会的排除経験により、自尊感情のみだけでなく、対人関係の維持に支障をきたすことが遠藤 (2005) からうかがえる。このことから、社会的排除経験により、うつ病などの発症や薬物乱用、非行や犯罪率の増加といった社会問題につながる危険性があると考えられる。知的・生産的活動、あるいは養育・教育活動を行う全ての集団にとって、社会的排除の状態を作り出し維持することは、集団の結束、志気や生産性の向上、メンバーの人間形成などあらゆる側面において致命的な結果をまねくであろう。そのため、社会的排除の被害を最小限に留めるにはどのようにすればよいかを今後は検討すべきである。

引用文献

- Baumeister, R. F., & Leary, M. R. (1995). The need to belong: Desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation. *Psychological Bulletin*, *117*, 497-529.
- Baumeister, R. F., Smart, L., & Boden, J. M. (1996). Relation of threatened egotism to violence and aggression: The dark side of high self-esteem. *Psychological Review*, *103*, 5-33.
- Baumeister, R. F., & Tice, D. M. (1990). Anxiety and social exclusion. *Journal of Social and Clinical Psychology*, *9*, 165-195.
- Buhrmester, D. (1996). Need fulfillment, interpersonal competence, and the developmental contexts of early adolescent friendship. In W. M. Bukowski, A. F. Newcomb, & W. W. Hartup (Eds.), *The company they keep: Friendship in childhood and adolescence*. New York: Cambridge University Press. Pp. 158-185.
- Case, T. I., & Williams, K. D. (2004). Ostracism: A metaphor for death. In J. Greenberg, S. L. Koole, & T. Pyszczynski (Eds.), *Handbook of experimental existential psychology*. New York: Guilford Press. Pp. 336-351.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (2000). The "what" and

- “why” of goal pursuits: Human needs and the self-determination of behavior. *Psychological Inquiry*, **11**, 227-268.
- DeWall, C. N., & Baumeister, R. F. (2006). Alone but feeling no pain: Effects of social exclusion on physical pain tolerance and pain threshold, affective forecasting, and interpersonal empathy. *Journal of Personality and Social Psychology*, **91**, 1-15.
- Eisenberger, N. I., & Lieberman, M. D. (2005). Why it hurts to be left out: The neurocognitive overlap between physical and social pain. In K. D. Williams, J. P., Forgas, & W. von Hippel (Eds.), *The social outcast: Ostracism, social exclusion, rejection, and bullying*. New York: Psychology Press. Pp. 109-127.
- 遠藤由美 (2006). 自尊感情が社会的排除・拒絶への反応に及ぼす効果 関西大学社会学部紀要, **37**, 29-41.
- 福岡欣治・橋本宰 (1997). 大学生と成人における家族と友人の知覚されたソーシャル・サポートとそのストレス緩和効果 心理学研究, **68**, 403-409.
- Hazan, C., & Shaver, P. R. (1994). Attachment as an organizational framework for research on close relationships. *Psychological Inquiry*, **5**, 1-22.
- 本田周二 (2007). 同性友人関係とのネガティブな出来事と現在の友人関係—大学生を対象として— 東洋大学人間科学総合研究所紀要, **7**, 309-320.
- 法務総合研究所 (2003). 犯罪白書—変貌する凶悪犯罪とその対策(平成15年度版)— 国立印刷局.
- 伊藤忠弘 (1998). 特性自尊心と自己防衛・高揚行動 心理学評論, **41**, 57-72.
- 岩切準 (2005). 社会的排斥の経験が他者感情の認知に与える影響—「仲間はずれ」がもたらすもの— 日本社会心理学会第46回大会発表論文集, Pp. 678-679.
- Leary, M. R. (2001). *Interpersonal rejection*. New York: Oxford University Press.
- Leary, M. R. (2004). The sociometer, self-esteem, and the regulation of interpersonal behavior. In R. F. Baumeister, & K. D. Vohs (Eds.), *Handbook of self-regulation: Research, theory, and applications*. New York: McGraw-Hill. Pp. 8-25.
- Leary, M. R., Haupt, A. L., Strausser, K. S., & Chokel, J. T. (1998). Calibrating the sociometer: The relationship between interpersonal appraisals and state self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 1290-1299.
- Leary, M. R., Koch, E. J., & Hechenbleikner, N. R. (2001). Emotional responses to interpersonal rejection. In M. R. Leary (Ed.), *Interpersonal rejection*. New York: Oxford University Press. Pp. 145-166.
- Leary, M. R., Tambor, E. S., Terdel, S. K., & Downs, D. L. (1995). Self-esteem as an interpersonal monitor: The sociometer hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**, 518-530.
- Maslow, A. H. (1968). *Motivation and personality*. New York: Harper & Row.
- Mikulincer, M., Florian, V., & Hirschberger, G. (2004). The terror of death and the quest for love: an existential perspective on close relationships. In J. Greenberg, S. L. Koole, & T. Pyszczynski (Eds.), *Handbook of experimental existential psychology*. New York: Guilford Press. Pp. 287-304.
- Molden, D. C., Lucas, G. M., Gardner, W. L., Dean, K., & Knowles, M. L. (2009). Motivations for prevention or promotion following social exclusion: Being rejected versus being ignored. *Journal of Personality and Social Psychology*, **96**, 415-431.
- 岡田領・中山留美子 (2008). 对人的拒絶の概念—実験社会心理学領域を中心に— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学, **55**, 27-45.
- Sheldon, K. M., Elliot, A. J., Kim, Y., & Kasser, T. (2001). What is satisfying about satisfying events? Testing 10 candidate psychological needs. *Journal of Personality and Social Psychology*, **80**, 325-339.
- 塩田公 (2003). 状態自尊感情尺度の作成 日本社会心理学会第44回発表論文集, Pp. 738-739.
- Sommer, K. L. & Rubin, Y. S. (2005). Role of social expectancies in cognitive and behavioral responses to social rejection. In K. D. Williams, J. P. Forgas, & W. Hippel (Eds.), *The social outcast: Ostracism, social exclusion, rejection, and bullying*. New York: Psychology Press. Pp. 171-182.
- 館有紀子・宇野善康 (2000). 日本版状態セルフ・エスティーム尺度の検討 社会心理学会第41回発表論文集,

Pp. 206-207.

Tesser, A. (1988). Toward a self-evaluation maintenance model of social behavior. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, Vol. 21, New York: Academic Press, Pp. 181-227.

Twenge, J. M., Baumeister, R. F., Tice, D. M., & Stucke, T. S. (2001). If you can't join them, beat them: Effects of social exclusion on aggressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 81, 1058-1069.

Williams, K. D., (2001) *Ostracism: The power of silence*. New York: Guilford Press.

Williams, K. D., & Zadro, L. (2005). Ostracism: The indiscriminate early detection system. In K. D. Williams, J. P. Forgas, & W. von Hippel (Eds.), *The social outcast: Ostracism, social exclusion, rejection, and bullying*. New York: Psychology Press. Pp. 1-24.

付録 1

否定的感情 (10 項目)

-
1. 自分の日頃のふるまいは適切だと思う
 2. 他の人よりも劣っていると思う
 3. 自分は何も悪くないと思う
 4. 自分のことが気に入らない
 5. 私は、自分自身を大切に思う
 6. 私には魅力がないと思う
 7. 愚かな人間にみられていないかと心配である
 8. とても悲しい気分である
 9. 自分自身に魅力を感じる
 10. 自分自身を望ましくない人物だと感じる
-

付録 2

当事者の受容可能性の程度 (8 項目)

-
1. 2人は、私を無視し続けると思う
 2. 2人は、私を受け入れてくれると思う
 3. 私は2人にとって邪魔な存在だと思う
 4. 2人は、私と付き合いってくれると思う
 5. 2人の中での私の居場所は存在しないと思う
 6. 2人と仲よく出来ると思う
 7. 2人は自分と一緒にいてくれないと思う
 8. 2人と楽しく過ごせると思う
-

付録 3

新奇他者からの受容可能性の程度 (8 項目)

-
1. 他の人は、私を無視し続けると思う
 2. 他の人は、私を受け入れてくれると思う
 3. 私は他の人にとって邪魔な存在だと思う
 4. 他の人は、私と付き合いってくれると思う
 5. 他の人の中での私の居場所は存在しないと思う
 6. 他の人と仲よく出来ると思う
 7. 他の人は自分と一緒にいてくれないと思う
 8. 他の人と楽しく過ごせると思う
-

(しみず みちか 生活機構研究科心理学専攻1年)

(ふじしま よしつぐ 心理学科)